ショッパー Shopper

名古屋から鳥取へ 2021年春号

移住・定住者に聞いた 鳥取県のいいところ

今回訪れた日野郡江府(こうふ)町と西伯(さいはく)郡南部町は鳥取県西部の、いわば田舎町。県外から移住した人に、暮らしてみて感じた鳥取県のいいところを伺いました。

企画・制作／中日新聞広告局

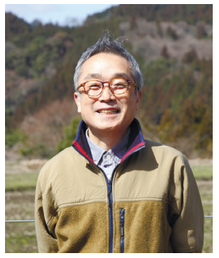
●問い合わせ●
ふるさと鳥取県産業・観光センター
中区栄4-16-36 久屋中日ビル5階
TEL052-262-5411FAX052-262-5415
https://www.pref.tottori.lg.jp/nagoya/

清らかな水資源が自慢 大山の南麓に広がる名水のまち

秀峰・大山の南麓(奥大山)に位置する江府町。「水(江)の集まる中心(府)」を意味する町名から、「名水のまち」として知られています。大山の地層に染み込んだ地下水は軟らかい口当たりで、すっきりとした味わい。これに注目して、大手飲料メーカーを含めて3社がミネラルウオーター工場を、1社が湧き水の製氷工場を同町内に構えます。

定年を機に、大阪から奥さまの出身地の鳥取県へ移住した遠藤明宏さんも、奥大山の水に魅せられた一人です。趣味だったコーヒーの焙煎に奥大山の水を使用したいと考え、拠点に選んだのが同町。昨年、コーヒー生豆をその水で洗ってから焙煎し販売する会社を立ち上げました。「奥大山の恵みを活用したこのコーヒー豆を、町おこしにつなげたい」と意気込む遠藤さん。手応えを少しずつ感じているそうで、描く青写真に迷いはありません。

小さな集落が点在する同町において、遠藤さんが「後世に残したい風景」と語るのが茅葺小屋のある御机(みつくえ)地区。茅葺屋根の向こうには大山の南壁を望み、辺りの田園と併せて日本の原風景ともいえる景色が広がります。ご当地グルメについても伺いました。「何といっても『大山おこわ』。もち米と一緒に鶏肉、ゴボウやニンジンなどを蒸し上げた一品で、飽きることのないおいしさがあります」



写真上／遠藤さん。「奥大山の水洗い珈琲豆」(問／電話090-3331-7114)と名付けた焙煎コーヒーは豆、粉とも180グラム1944円～。同左上／茅葺小屋(江府町御机)。同左／大山おこわ。「道の駅奥大山」(同町佐川908-3)のレストランなどで味わえる

私の好きな観光地 「木谷沢渓流」

奥大山スキー場から県道を挟んだ森の奥、散策道を進んだ先にある木谷沢渓流(江府町御机837-13)。岩を覆うコケの緑は、春の到来とともに一層鮮やかさを増します。問／電話0859-75-6007(江府町観光協会)

人が自然体で交流できる 山間部エリアは まち全体が里山環境

東京で小さなカフェを営んでいた瀧山佳世さんが、ご主人の故郷である山間部の南部町へ移り住んだのは10年ほど前のこと。手狭だった東京の店とは違う、ゆったりとしたスペースで、子ども連れもくつろげるカフェが作りたかったのだそうです。ご主人の実家近くの空き家をほぼそのまま利用したという同町初のカフェは、今やすっかり子育て中のママや地域の人の交流の場。「暮らすように楽しめる、鳥取のいいところが詰まった場所になりました」

自然豊かな同町では、その恵みを生かした味こそがご当地グルメです。瀧山さんは季節ごとに素材を変えたスイーツなどを提供し、近隣の店は旬の果物を使ったジェラートをラインアップ。地元で採れた食材が四季を知らせてくれます。

南部町は、まち全体が環境省の「生物多様性保全上重要な里地里山」に選定されています。瀧山さんによると、里山が日常的に体験できるこの町では、目的地を決めず、散歩する感覚でのんびりと自転車を走らせる「ポタリング」がお勧めとか。「森の木々や田畑の風景、鳥のさえずりが、春は一層心地良く感じられます」。中でも訪れたいのが、広大な田園で浮かぶようにたたずむ小原神社(客神社)。「ブロッコリー神社」や「トトロの森神社」の愛称でも親しまれている、同町きってのフォトジェニックスポットです。

写真右上／300年ほど前に建てられたとされる小原神社(客神社／南部町原803)。同右／瀧山さんによる手作りの「季節のフルーツケーキ」(495円)。同上／「カフェ七草」(問／電話080-4673-6370)を営む瀧山さん

私の好きな観光地 「とっとり花回廊」

日本最大級のフラワーパーク、とっとり花回廊(南部町鶴田110)。大山を背にした50ヘクタールの園内を囲むのは、屋根付展望回廊です。桜を皮切りに、4月以降は開花リレーが始まります。問／電話0859-48-3030